福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

主宰論説17

西安探訪記

平成 7 年(1995 年)中国の西安市（昔の長安）の西安交通大学で、科学技術振興調整費総合研究「材料のエコマテリアル化のための設計・評価に関する研究」（平成５～９年度）（エコマテリアル・プロジェクト）の一環として、「第 2 回エコマテリアル国際会議」が開催され、「建築用複合材料のリサイクル設計」というタイトルでの研究発表のために、参加した。当時、未踏科学技術協会の事務局を担当していた末次（旧姓松尾）さんや、津田さん、プロジェクト代表で世話人の原田氏【現在、エコマテリアル・フォーラム会長】らの、西安までの渡航についての精力的な、取り計らいもあって、八木エコマテリアル研究会幹事長を団長として、ツアーを組んで、プロジェクトメンバーの多くが参加した。日本航空で上海まで行き、中国東方航空で西安まで赴いた。一緒に「複合材料のエコマテリアル化」の研究をやっていた化学関連の研究者の静岡大学の上野先生（今は、故人）氏と化学技術研究所主任研究員の松崎氏(今は故人)の両氏が、当国際会議で、「高分子材料のリサイクル技術」関連での研究発表のために、参加していた。また、「化学的改質による木材のエコマテリアル化」関連で、森林総合研究所の大越さん、瀬戸山さんなども参加していた。また、関西大学の和田先生、中野研究員も、「廃棄物の再生利用と最終処分」関連で、参加していた。中国で

１）西安市内探訪

で国際会議に送れた暇を見つけて西安市内の名所旧跡を訪れ、市井の庶民生活の状況を観察もした。夜店の食事も多数の参加があったまずまずの時間行事であった。

小雁塔は、ホテルのグラン・メディア西安から近い大慈恩寺という仏教寺院の境内にあり、『大唐西域記』で有名な玄奘（三蔵法師）が、インドに赴いて持ち帰ったという仏典や仏像が所蔵されており、5 階建てのレンガ造の塔である。中には、木造の部屋があり、木製の階段を通じて、上階まで登れるようになっていた。別に、小雁塔もあるそうであるが、近くではないので、訪れなかった。中央公園は、西安の中心部にあり、広場と植栽が混在し、市民の憩いの場となっているようであった。夜店は、当時盛んであり、焼き鳥など、色々な食彩が並べられ、賑わいを見せていた。旧市街地を囲む城壁も残っていて、西南の城壁と門は、旧絹の道の起点となっていた。旧市街地の中は、東西南北が碁盤の目のようになっていたが、鼓楼や鐘楼が有名である。京城内部は、古い長安を彷彿させる街並みが連なっていたが、中華料理店とともに、近代的ビル建築もかなり見かけた。市内観光のあと、ホテル近くの界隈にある土産店を訪れ、帰りに、水墨画の掛け軸とヒスイと見まがう濃緑の玉杯を購入して持ち帰った。

２）西安郊外探訪記

華清池は玄宗皇帝が楊貴妃のために造営した離宮で、西安市街から東へ約 30 キロ行った郊外

の驪山（りざん）のふもとにある有名な温泉池である。そこを訪れた。桃の花は、シーズン・オフだったが、ザクロの花を見かけた。大きな池の周りには、散策のためのいろいろな植栽があるようだ。

３）兵馬俑探索訪問記

西安からかなり離れたところに、中国の最初の皇帝である秦の始皇帝陵があるが、そこを取り囲む形で、彼の崩御の殉職の代わりに作られた大量の土偶が埋葬されていたのが、兵馬俑である。19 世紀後半に発見されて、世界を驚かせ、中国の世界文化遺産となっている。そこを訪れた。当時、堂山昌夫教授夫妻も訪れていた。その規模も目を見張ったが、土偶とはいえ、等身大の多数の人間の形のものばかりでなく、馬、馬車、兵器の土偶もあった。その、種類の多さ、その精巧さは、人を驚かせるものであった。

あれから約 27 年が経過した。西安は、長安時代の旧京城を残しながら、東西に、スプロール状に、鉄筋コンクリート造（RC）高層建築が乱立する現代的都市に変貌を遂げているようである。ただ、旧京城内の美しい建造物や街並みは、中国の貴重な文化的世界遺産として残してほしいと願う次第である。

令和 3 年 1 月 14 日

短歌:長安に連なる西域を旅した隊商の思い新たなり絹の道

俳句：大雁塔仏の道は遠い彼方に

ヴェルサイユ宮殿等探訪記

パリの西部のコンコルド・ラファイエットという鉄筋コンクリート（RC）造の現代風のホテルに宿泊して 2 日目の午前、パリ近郊のヴェルサイユを訪れ、ブルボン朝第 3 代フランス王ルイ 14 世の絶対王政時代のバロック建築の典型と言われるヴェルサイユ宮殿を見学した。新・旧の建築の見事な対照とも言える。その日は、あいにく雨であったが、壮麗な宮殿と庭園を十分に鑑賞できた。宮殿自体は、3 階建てで、東側に入り口を持つ「コの字型」の本殿の左右に 2 つの翼棟が繋がった構造をしている。1、2 階部分が、“美術館”として、一般的に公開されている。王室礼拝堂や大居室、王妃の部屋、アポロンの部屋、ヴィーナスの部屋など、700 近い部屋がある。その中で、鏡の間は、庭園に面する 17 の窓と、それに正対する壁に同じ数の鏡が並び、窓から入り込む光が反射するように設計されているようだ。天井には、ルイ 14 世の功績を示す絵画や、王家の紋章であるユリの花の装飾がある。諸外国の元首や特使との謁見や舞踏会の会場となり、以降ヨーロッパ各国の宮殿建築の模範となったようである。ヴェルサイユは、30 年ぐらい前に、「材料科学から建設工学まで」に関する国際会議が開催され、旧建設省建築研究所時代の同僚の一人の桝田さんと一緒に訪れたこともあったが、その時とはまた別の新たな印象を持った。宮殿から南に延びる広大な庭園もすばらしいものであったが、日本の、自然と融合する様式と異なり、人工の装飾美を強調し、自然を威圧する様式のようだ。元々、ヴェルサイユ宮殿

のモデルとなったのは、パリの南東にあるルイ 14 世の財務卿ニコラ・フーケの居城ヴォール・ヴィコンテ城である。２０年前、「物質・エネルギー同時移動に関する日仏共同研究」のために、パリに１０日間滞在したことがあったが、そのとき、雪景色のこの古城を訪れたことがあった。少し鄙びていたが、城の骨格と庭園および内部の装飾・家具・調度類など、目を見張るすばらしいものがあった印象が残っている。この城のすばらしさに嫉妬したルイ 14 世が、建築家ル・ヴォー、庭園技師ル・ノートルをスタッフとして、新たに、王家の勢威を示す意味も兼ねて作ったのが、ヴェルサイユ宮殿であるという。いずれにせよ、華美と豪勢の限りを尽くしたフランスのブルボン朝の王家と貴族の生活と社交のための宮殿であったようだ。
平成 24 年 6 月 26 日
俳句：ヴェルサイユ雨に煙る館かな
俳句：ヴェルサイユ華美と豪奢の館かな

あれから、１０年が経過した。宮殿と庭園の美しい映像が、瞼に焼き付いているようだ。
令和３年１月１４日脱稿
俳句：薔薇の庭幾何学模様の人工美
短歌：遥かなる遠景を煙らせて華美につくりし人工美